

【研究ノート 10】

原始仏教聖典における「高名な婆羅門」たち

森 章司

[1] まずこの論稿の製作目的と凡例的なものを記す。

[1-1] 原始仏教聖典には「はなはだ高名にして富裕なる婆羅門 (abhiññātā abhiññātā brāhmaṇa-mahāsālā)」とされる婆羅門が登場する。彼らが原始仏教聖典において「はなはだ高名にして富裕なる婆羅門」と称されるのは、原始仏教聖典の編集者たちが、釈尊の教えがインド各地に伝えられるに際して彼らが注目すべき役割を果たしたと評価しているがゆえであろう。

本稿はこれら婆羅門たちの事跡を調査し、バラモン教が主流であった当時のインドに釈尊の教えがどのように浸透していったのかの一端を探ってみようとするものである。

ところでここに「高名な婆羅門」というのは、パーリ聖典の *DN.013 Tevijja-s.* (1)、*MN.098 Vāseṭṭha-s.* (2) = *Suttanipāta 003-009* (3)、*MN.099 Subha-s.* (4) などにおいて取り上げられている婆羅門であって、彼らは学問においてすぐれ、多くの弟子を持ち、家柄もよく、そして裕福であったとされている。しかしながら例えば上記 *DN.013 Tevijja-s.* の対応漢訳経典である『長阿含経』026「三明経」(5) は、彼らを「七世以来父母真正、不為他人之所軽毀。異典三部諷誦通利、種種経書善能分別。又能善於大人相法觀察吉凶祭祀儀礼、有五百弟子教授不廢」とするのみで、「はなはだ高名にして富裕」などの語句はない。しかし本稿ではパーリと同じような文脈中に挙げられている婆羅門たちについても「高名な婆羅門」として扱う。

また仏教の典籍を考察の材料とする以上、これら婆羅門の事跡を調査するとしても、バラモン教の宗教者としての事績は明らかになるはずはない。したがってここでは彼らと釈尊との関係、特に釈尊に帰依して**優婆塞**となった者についてはその年代を考察することを主題とする。

(1) vol.I p.235

(2) 婆私吒経 vol.II p.196、南伝 11 上 p.256。ただし本文は *Suttanipāta* (経集) に譲られ、省略されている。

(3) p.115、文庫 p.131

(4) 須婆経 vol.II p.196、片山・中部 4 p.499

(5) 大正 01 p.104 下

[1-2] この「優婆塞となる」ということについては一言しておく必要があるだろう。優婆塞は「仏と法と僧に帰依している在家の男性信者」(1) のことであるが、優婆塞となった年代を考察する以上、このような状態になるのが無自覚的なもので、いつそのような状態になったかが曖昧模糊としているようなものであっては意味をなさない。

本稿では経の概要を紹介するときに、単に「優婆塞となった」と記すのみであるが、元のテキストでは次のように記されている。

パーリテキストではすべて次のような文章である。

この私は世尊ゴータマと法と比丘サンガに帰依します。世尊ゴータマは今より以降終生、私を優婆塞として帰依することをお認めください (esāhaṃ bhavantam Gotamaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammañ ca bhikkhusaṃghañ ca. upāsakaṃ maṃ bhavaṃ Gotamo dhāretu ajjatagge pāṇupetaṃ saraṇaṃ gataṃ.) (2)。

しかし漢訳経典では翻訳者の相違もあってこの文章は区々である。また各阿含の中でもかなりのヴァリエーションがあるが、ここではそのなかの一例のみを紹介しておく。

『長阿含』：我今帰依仏法及比丘僧。聽我於正法中為優婆塞。尽形寿不殺不盜不婬不欺不飲酒 (3)。

『中阿含』：我今自歸於仏法及比丘衆。唯願世尊。受我為優婆塞。從今日始終身自歸乃至命尽 (4)。

『増一阿含』：我今自歸沙門瞿曇。唯願沙門瞿曇。聽為優婆塞。尽其形寿不敢復殺乃至飲酒 (5)。

なお本稿中には『雑阿含』『別訳雑阿含』を用いるところはないが、参考のためにその用例も掲げておく。

『雑阿含』 (6)：我從今日歸依仏歸依法歸依僧為優婆塞。我從今日已尽寿命。

『別訳雑阿含』：我於今日已得出過。歸依於仏亦復歸依法僧二宝。我持優婆塞戒。從今尽寿。歸依三宝 (7)。

以上から、在俗信者が優婆塞となるときには、次のような2つの条件があることがわかる。

① 釈尊ないし仏弟子に対して、今（今日）から終生優婆塞となることを受け入れてほしいと申し入れる。

② 釈尊ないし仏弟子の前で三宝に帰依することや在家戒としての五戒を終生守ることを誓う。

このように優婆塞となるのはきわめて自覚的であり、しかも釈尊や仏弟子に誓う形でなされるのであるから、またその時期も記憶されたであろうということである。

とはいえ、サンガの中の唯一のヒエラルヒーは法臘であって、したがって具足戒を受ける時には、その年月日はもちろん時間さえも覚えておかなければならないという規則がある比丘あるいは比丘尼とは異なり、それほど厳格なものではなかったであろう。したがって以下にその事例を紹介するように、同一人物が優婆塞となったという記述が、さまざまな異なったシチュエーションのもとに語られることがあるということも注意しておかなければならない。実際にはその機運が熟して、徐々に優婆塞としての自覚が高まっていくというのが現実であったかもしれない。しかしここでは、1人の人物が何度も優婆塞となったというように見える記述は、優婆塞となった1回の事実が、視点を変えて伝えられたものと仮定して議論を進めたい。

(1) SN.055-037 (vol. V p.395)、『雑阿含』 928 (大正 02 p.236 下)、『雑阿含』 929 (大正 02 p.237 上)、『別訳雑阿含』 152 (大正 02 p.431 中)、『別訳雑阿含』 153 (大正 02 p.431 中)

(2) MN.004 *Bhayabherava-s.* (怖駭経 vol. I p.024) など。なお帰依する者が2人以上の場合は名詞語尾や活用変化が複数形となる。DN.013 *Tevijja-s.* (vol. I p.252) など。また 'bhavantam' が 'bhagavantam' とされることも多い。DN.003 *Ambaṭṭha-s.* (阿摩晝経

vol.I p.110) など。

- (3) 『長阿含』020「阿摩昼經」(大正01 p.088上) など。
- (4) 『中阿含』170「鸚鵡經」(大正01 p.706中) など。
- (5) 『増一阿含』050-009(大正02 p.813下) など
- (6) 『雜阿含』030(大正02 p.006中)
- (7) 『別訳雜阿含』027(大正02 p.422下)

[2] *DN.013 Tevijja-s.*などのパーリ聖典が上げる「高名な婆羅門」とは以下の5人である。整理のために番号を付して紹介する。

- ①チャンキー婆羅門 (Caṅkī)
- ②タールッカ婆羅門 (Tārukkha)
- ③ポッカラサーティ婆羅門 (Pokkharasāti) (1)
- ④ジャーヌッソーニ婆羅門 (Jāṇussoṇi)
- ⑤トーデッヤ婆羅門 (Todeyya)

ただし上記 *DN.013 Tevijja-s.*に対応する漢訳經典は『長阿含經』026「三明經」(2)であるが、ここには

- ③沸伽羅娑羅婆羅門 (ポッカラサーティ)
- ②多梨車婆羅門 (タールッカ)

の2人しか登場しない。

また *MN.099 Subha-s.*の漢訳対応經は『中阿含』152「鸚鵡經」(3)であるが、ここには

- ①商伽梵志
- ④生聞梵志
- ③弗袞娑娑羅梵志
- ⑤汝(經の主人公である鸚鵡摩納都題子)の父の都題

の4人の名前が挙げられるのみである。しかもこの4人は「昔梵志あつて寿終命過した」とされている。これはすぐ後に述べる、⑤トーデッヤ婆羅門の息子のスバが釈尊の教えに帰依して優婆塞となった時点のことであって、いうまでもなく釈尊の主な活動時には彼らは存命していたとみなければならない。

そして上記パーリ聖典には対応しないが、「高名な婆羅門」に相応するであろう婆羅門たちを列挙する經に『長阿含』022「種徳經」(4)と『長阿含』023「究羅檀頭經」(5)がある。これには次のようなバラモン名が列挙される。前者には次の5人が挙げられ、

- ③沸伽羅娑羅婆羅門  
梵婆羅門
- ②多利遮婆羅門  
鋸齒婆羅門  
首迦摩納都耶子

後者には、

- ③沸伽羅娑羅婆羅門  
梵婆羅門

②多利遮婆羅門

種徳婆羅門

首伽摩納兜耶子

が挙げられている。下線を施した婆羅門は両経で一致しない。またこのうちパーリ聖典に挙げられる「高名な婆羅門」と一致するのは番号を付した2人のみである。

一致しない婆羅門のうち「首伽摩納都耶子」「首伽摩納兜耶子」は、⑤トーデッサ婆羅門に対応しそうであるが、「摩納都耶の子」「摩納兜耶の子」というのであるから、パーリ聖典のいう「トーデッサの子」である「スバ摩納（青年婆羅門）」（*Subha Todeyya-putta māṇava*）という人物であってトーデッサ自身ではない。ちなみに摩納（*māṇava*）は「青年婆羅門」のことである。

この人物は「鸚鵡摩納都題子」とも漢訳されるが<sup>(6)</sup>、鸚鵡はパーリ語では‘*suva*’であり、サンスクリット語では‘*śuka*’であるから、‘*subha*’を鸚鵡と理解したのかもしれない。「首伽」は‘*śuka*’の音写に相違なからう。すなわち「‘*Subha*’（首伽、首伽、鸚鵡）」という名の‘*Todeyya*’（都耶、兜耶、都醜）の息子である青年婆羅門ということになる。

また「鋸齒婆羅門」と「種徳婆羅門」は、「種徳」を主人公とする『長阿含』022では「鋸齒婆羅門」が挙げられ、究羅檀頭を主人公とする『長阿含』023では「種徳婆羅門」が挙げられるという形になっている。

『長阿含』023「究羅檀頭経」の対応経は *DN.005 Kūṭadanta-s.*<sup>(7)</sup> であって、*Kūṭadanta* の‘*kūṭa*’は鋤とかハンマー、‘*danta*’は歯という意味であるから「鋸齒婆羅門」は究羅檀頭婆羅門ということになる。また『長阿含』022「種徳経」の対応経は *DN.004 Soṇadaṇḍa-s.* であるから、「種徳婆羅門」はソーナダダ婆羅門（*Soṇadaṇḍa*）に相応することはいうまでもない。これら2つの経は経番が『長阿含』では022、023、*DN.*では003、004と連続するから、互いに意識しあっているのである。

これらクータダダ婆羅門とソーナダダ婆羅門の2人も原始仏教聖典に登場する婆羅門であるが、スバが「トーデッサの子」とされるように、おそらくパーリ聖典が挙げる「高名な婆羅門」たちよりは一世代後の婆羅門であって、この2人をそれと同列に扱うことはできない。

またもう1人の「梵婆羅門」はパーリ聖典や他の漢訳聖典において比定すべき人物が見つからない。あるいは音からいうと *DN.013 Tevijja-s.* とその対応経に登場する③ポッカラサーティの弟子であるヴァーセッタ婆羅門（*Vāsetṭha*）、あるいは②タールッカの弟子であるバラドヴァージャ婆羅門（*Bhāradvāja*）<sup>(8)</sup> に相応するかもしれないが、もしそうだとした場合もポッカラサーティもしくはタールッカの弟子なのであるから、一世代後の人物であることに変わりはない。

このように『長阿含』022「種徳経」と『長阿含』023「究羅檀頭経」が挙げる婆羅門たちは、これらをパーリ聖典のいう「高名な婆羅門」と見なすわけにはいかない。それはこれら2つの漢訳聖典に対応するパーリの *DN.004 Soṇadaṇḍa-s.*<sup>(9)</sup> と *DN.005 Kūṭadanta-s.*<sup>(10)</sup> の同じ文脈中に出るのは、③ポッカラサーティ婆羅門のみであることから窺われる。したがって以下の論考においては、『長阿含』022「種徳経」と『長阿含』023「究羅檀頭経」

は、「高名な婆羅門」が一括りにあげられている資料には含めないこととする。

以上のように、パーリ・漢訳が共通してあげるのは、

- ①チャンキー婆羅門
- ②タールッカ婆羅門
- ③ポッカラサーティ婆羅門
- ④ジャーヌツソーニ婆羅門
- ⑤トーデッヤ婆羅門

の5人であって、本稿ではこの5人を「高名な婆羅門」として扱う。

- (1) Pokkharasāti はテキストによっては Pokkharasādi とされる。ここでは地の文章においては「ポッカラサーティ」に統一する。
- (2) 大正 01 p.104 下
- (3) 大正 01 p.666 下
- (4) 大正 01 p.094 上
- (5) 大正 01 p.096 下
- (6) 『中阿含』 152「鸚鵡経」(大正 01 p.666 下)、『中阿含』 170「鸚鵡経」(大正 01 p.703 下)
- (7) 究羅檀頭経 vol.I p.127、
- (8) DN.013 *Tevijja-s.* (vol.I p.235)、『長阿含経』 026「三明経」(大正 01 p.104 下)、MN.098 *Vāseṭṭha-s.* (婆私吒経 vol.II p.196)、*Suttanipāta* 003-009 (p.115、文庫 p.131)
- (9) 種徳経 vol.I p.111
- (10) 究羅檀頭経 vol.I p.127

[3] まず前項に掲げた「高名な婆羅門」が一括りにして挙げられる経を検討する。その際に経の概要を併せて紹介する。実際のところ概要は本稿の論旨には直接の関係はないのであるが、われわれはこの総合研究の最終目的を「釈尊および釈尊教団史年表」と「釈尊年齢にしたがって配列した原始仏教聖典目録」の編集としており、後者の目録には1つ1つの経の概要をも示すという計画であるので、それに備えてという意味が大きい。

またこの目録には対応経(同じ部類<sup>(1)</sup>で同じ内容あるいは共通した内容を持つ経)と相応経(異なる部類で同じ内容あるいは共通した内容を持つ経)の関係を示すことにしており(簡単にいえば「律蔵」を含めた「パ・漢互照録」に相当するもの)、これにも備えて本稿では、対応・相応関係にあるひとまとまりのいくつかの経(律も含む)には行間を空けないが、対応・相応しない経には行間を空けるという形式をとる。

なお仏在処の記述のあるものはその個所に太い下線を施し、登場する人名や話題にあげられる人物名は太字とし、注意して読んでいただきたい記述には破線の下線を施す。仏在処が記される場合はその個所に「世尊」あるいは「仏」ということばがあるが、それにも拘わらず実際の経文中には釈尊が登場しない経もあるので、釈尊に関しては釈尊が現前されることが示される最初の個所を太字とする。この方針はこの節のみならず、以下の各節でも同じである。

(1) 同じ部類というのは、DN.=長阿含、MN.=中阿含、SN.=雜阿含、別訳雜阿含、AN.=増一阿含をいい、異なる部類とは、例えば DN.に含まれる経が漢訳では中阿含に含まれる経と

同内容もしくは共通した内容を持つ場合をいう。

[3-1] 「高名な婆羅門」が一括りにして挙げられる経の、ごくおおまかなあらすじは次のとおりである。

*DN.013 Tevijja-s.* (vol.I p.235、南伝6 p.333、片山・長部2 p.400) : あるとき世尊はコーサラ国を遊行してマナサーカタ (Manasākata) というコーサラの婆羅門村に入れ、マナサーカタに近いその北のアチラヴァティー河の岸辺にあるマンゴー林に住された。その時そこにはなほだ高名にして裕福なる婆羅門たちがいた。チャンキー、タールツカ、ポッカラサーティ、ジャーヌツソーニ、トーデツヤである。

その時、ポッカラサーティの弟子であるヴァーセッタ (Vāsetṭha) とタールツカの弟子であるパーラドヴァージャ (Bhāradvāja) が、それぞれの師匠が梵天との共住にいたる真正の道を説いていると議論しあったが互いに説得しあえなかった。そこで世尊のところに行き、その説法を聞いて優婆塞となった。

*MN.098 Vāsetṭha-s.* (婆私吒経 vol.II p.196、南伝11上、p.196、片山・中部4 p.485。ただし次の *Suttanipāta 003-009* と全同であるため、PTS テキストにおいても南伝においても全文が省略されている) : あるとき世尊はイッチャーナンカラ村のイッチャーナンカラ林 (Icchānamkala Icchānamkalavanasaṇḍa) (1) に住された。その時そこにはなほだ高名にして裕福なる婆羅門たちがいた。チャンキー、タールツカ、ポッカラサーティ、ジャーヌツソーニ、トーデツヤである。

時にポッカラサーティの弟子であるヴァーセッタ (Vāsetṭha) とタールツカの弟子であるパーラドヴァージャ (Bhāradvāja) が、何をもって婆羅門とすべきかと議論しあったが互いに説得しあえなかった。そこで世尊のところに行き、「生まれによって婆羅門なのではない。行為によって婆羅門なのである」という説法を聞いて優婆塞となった。

*Suttanipāta 003-009* (p.115、南伝24 p.226、岩波文庫 p.110) : 上記 *MN.098 Vāsetṭha-s.* と全同

なお『長阿含経』026「三明経」には、前述のように③沸伽羅娑羅婆羅門 (ポッカラサーティ) と②多梨車婆羅門 (タールツカ) の2人しかあげないが、内容的に *DN.013 Tevijja-s.* と対応するから、この内容も紹介しておく。

『長阿含経』026「三明経」(大正01 p.104下、国訳7 p.357) : あるとき世尊は俱薩羅国の伊車能伽羅 (イッチャーナンカラ) という婆羅門村に住された。このとき沸伽羅娑羅婆羅門 (ポッカラサーティ) と多梨車婆羅門 (タールツカ) が小縁あつて伊車能伽羅村に来ていて、婆悉咤 (ヴァーセッタ) という沸伽羅娑羅の弟子と、頻羅墮 (パーラドヴァージャ) という多梨車の弟子が議論し、決着がつかなかったので世尊のところに行き、説法を聞いて遠塵離垢して法眼を生じ、仏の所説を歡喜奉行した。

以上の3経 (*Suttanipāta 003-009* を含めると4経) は相互に対応関係にあることは一読して明白である。ただし *DN.013 Tevijja-s.* が仏在処や高名な婆羅門たちがいたところをコーサラ国のマナサーカタとするのに対して、『長阿含経』026「三明経」、*MN.098 Vāsetṭha-s. = Suttanipāta 003-009* はコーサラ国のイッチャーナンカラとする違いがある。しかし「三明経」は2人の婆羅門がそこに滞在していたのは「小縁あつて」のことであった

としている。だからこれらの経は、5人（漢訳では2人）の婆羅門たちの住所はイッチャーナンカラではなかったと考えていたかもしれない。

- (1) *Icchānaṃkala* は SN.054-011 (vol. V p.325)、AN.005-003-030 (vol. III p.030)、AN.006-004-042 (vol. III p.0341)、AN.008-009-086 (vol. IV p.340) などでは *Icchānaṃgala* と表わされるが、本稿では *Icchānaṃkala* に統一する。

[3-2] ちなみにイッチャーナンカラという婆羅門村は『長阿含経』026「三明経」によればコーサラ国にあったとされているが、コーサラ国のどのあたりにあったのであろうか。先に「モノグラフ」第20号に掲載した【論文26】「原始仏教時代の通商・遊行ルート」<sup>(1)</sup>を書いた時に、メーダルンパ (*Medaḷumpa*)、セータヴヤー (*Setavyā*)、セータカ (セータカ、*Setaka, Sedaka*) と関連してイッチャーナンカラの位置も論考していた。この原稿はこの論文に組み入れなかったため未公表であるが、そこでは、カピラヴァットゥと舎衛城を東西に結ぶルートの途中にあって、このルートはカピラヴァットゥに近いところからいけばメーダルンパ (釈迦国) → セータヴヤー (以下コーサラ国) → セータカ → イッチャーナンカラを経由して舎衛城に至ると考えていた。今はこれにしたがってイッチャーナンカラは舎衛城から東方にあり、さほど遠くない位置にあったとしておく。

マナサーカタについては検討していないが、アチラヴァティー河の近くにあったとされているから、これも舎衛城のごく近くにあったものと考えておけばよいであろう。「三明経」は「小縁あって」というのであるが、「小縁」はちょっとした用件でというような意味であろうから、2人の婆羅門の住所がイッチャーナンカラではなかったとしてもそう遠方ではなかったと解釈してよいであろう。

- (1) 森章司・金子芳夫著、2015年11月

[3-3] また5人の「高名な婆羅門」たちを列挙する *MN.099 Subha-s.* とその対応漢訳経の概要は次のようである。ただしこれらは実際に登場するのではなく名が列挙されるのみである。

*MN.099 Subha-s.* (須婆経 vol. II p.196、南伝 11 上 p.257、片山・中部 4 p.499) : あるとき世尊は 舎衛国の祇樹給孤独園 に住された。そのとき トーデッヤの子 (Todeyya-putta) である スバ (Subha) が所用のために舎衛城の 居士のところ に滞在していた。スバは居士に「舎衛城は阿羅漢たちに見放されていない (*avivittā sāvatti arahantehi*) と聞いた、私はどんな婆羅門を恭敬すべきであろうか」と尋ねた。居士は世尊に会いに行くことを勧め、会いに行った彼は在家と出家について質問した。世尊はスバに、チャンキー、タールッカ、ポッカラサーティ、ジャーヌツソーニ、トーデッヤ などは五蓋によって覆われ、超人法 (*uttarimanussadhamma*) や 聖なる知見 (*alamariyañānadassana*) を具えているなどということはないと評された。スバは世尊の説法を聞いて優婆塞となった。

彼はその帰りに ジャーヌツソーニ婆羅門 に会った。婆羅門は「バーラドヴァージャ (Bhāradvāja) よ」と語りかけ、「沙門ゴータマのところより来たということであるが、沙門ゴータマには智慧弁才があると思うか」と尋ねた。スバは世尊を智慧弁才がある者と讃歎した。 ジャーヌツソーニ はすべてが白づくめの馬車から降り、世尊のおられる方に合掌を差し向け、「パセーナディ (波斯匿) 王には利得がある。王の領

土には如来が住している」とウダーナを誦した。

『中阿含』152「鸚鵡経」（大正01 p.666下、国訳5 p.329）：あるとき世尊は王舎城の迦蘭陀竹林園に住された。そのとき鸚鵡摩納都題子が所用があつて王舎城に来ており、居士の家に寄宿していて、居士に「沙門梵志の衆の師となり、教えを請うて歓喜せしめるのは誰か」と質問した。居士は世尊だと答えたので彼は世尊に会いに行き、在家のほうが出家より勝れていると主張したが、世尊は正行を行ずるには在家・出家を問わないと説かれた。そして世尊は昔梵志あつて寿終命過した商伽梵志・生聞梵志・弗袈娑娑羅梵志および汝の父の都題は「盲にして目なく、智慧を滅する五蓋に覆われている。このような人は義を見ることができないし、心の念ずるところを知ることができない」とし、慈悲喜捨を俱して煩惱なく知れば人上の法を知ることができる」と説かれた。彼は優婆塞となり、世尊の所説を歓喜奉行した。

上記2経はおおまかな内容は一致するが、パーリには現実にジャーヌッソーニが登場するのに、漢訳には名しか挙げられないという大きな相違がある。またパーリでは5人の高名な婆羅門たちは存命するように描かれているが、後者は商伽（チャンキー）梵志・生聞（ジャーヌッソーニ）梵志・弗袈娑娑羅梵志（ポッカラサーティ）および汝の父の都題（トーデッヤ）らは「昔梵志あつて寿終命過した」として、すでに死去しているとされており、大きな相違がある。これをどう処理するかについてはこの経の主人公のスバ（鸚鵡）を取り上げるときに検討するが、結論を先取りしていえばMN.099 *Subha-s.*（須婆経）の情報に誤りがあるというのが本稿の見解である。

また仏在処も前者が舎衛国の祇樹給孤独園とするに対し、後者は王舎城の迦蘭陀竹林園とする相違もあるが、両者ともトーデッヤの子であるスバは所用があつて舎衛城あるいは王舎城に来ていたとするから、その住所には関係がないものとして、ここではこれ以上深く追求しないこととする。

以上から、5人の「高名な婆羅門」たちの住所は舎衛城ないしはその近郊であつたと考えておいてよいであろう。

[3-4] ところで前項において紹介した5人の「高名な婆羅門」たちは、この経の説かれる時点ではまだ釈尊に帰依し、優婆塞にはなっていなかったと考えてよいであろう。

DN.013 *Tevijja-s.*とその相応経では、帰依して優婆塞になったのはポッカラサーティの弟子であるヴァーセッタ（*Vāsetṭha*）とタールッカの弟子であるバーラドヴァージャ（*Bhāradvāja*）である。またMN.099 *Subha-s.*とその相応経である『中阿含』152「鸚鵡経」では、同じく帰依して優婆塞となったのは、トーデッヤの息子のスバ（鸚鵡）である。そして後者では、「高名な婆羅門」たちは「五欲に縛られ、狂わされ、樂に耽っているから、超人法や聖なる知見を知り、見、覚るであろうという道理はない」（*So vata uttarimanussa-dhammā alamariyañāṇadassanavisesaṃ ñassari vā dakkhiti vā sacchi vā karissatīti n'etaṃ thānaṃ vijjati*）」<sup>(1)</sup>とか「盲にして目なく、智慧を滅する五蓋に覆われている。このような人は義を見ることができないし、心の念ずるところを知ることができない」と<sup>(2)</sup>と評されているからである。

ただしパーリではそのアッタカターにおいて<sup>(3)</sup>、ヴァーセッタとバーラドヴァージャは



師の「内弟子」であったとされている。仏教のサンガでは「内住弟子（*antevāsika, antevāsin*）」はまだ和尚や阿闍梨の監督下にある者であって、その進退を自らで決められない身分であった。おそらくバラモン教の場合のその師弟関係は、師匠の家に同居しながら一般には開放されていない教えや儀礼の行い方を秘法的に伝授されるのであるからもっと厳しかったのではなかろうか。このようなことを勘案してみると、ヴァーセッタとバーラドヴァージャが釈尊に帰依するについてはそれぞれの師に承認を受けていなければならなかったはずで、もしそうならその師匠であるポッカラサーティとタールッカはすでに仏教に理解を示すようになっていたのではないかとも想像される。

- (1) vol. II p.203
- (2) 大正 01 p.668 中
- (3) DN.-A. vol. II p.399、片山・長部 2 p.401

[3-5] ところで *MN.099 Subha-s.*には誤情報が含まれているとしたのであるが、ここに登場するジャーヌツソーニは、その時すべてが白づくめの馬車に乗っていたとされている。実は *MN.027 Cūlahatthipadopama-s.* (1) でもジャーヌツソーニは同じような馬車に乗っていたとされており、その対応漢訳の『中阿含経』146「象跡喻経」(2) でも同じである。そしてこれらの経では彼は釈尊に会いに行つて優婆塞となったとされている。ちなみに *SN.045-004* (3) とその対応漢訳の『雑阿含経』769 (4) でもジャーヌツソーニは同じく白づくめの馬車に乗っていたとされている。

このように白づくめの馬車がジャーヌツソーニのトレードマークのようなものであったようで、それは「梵乘 (*brahmayāna*)」(5) と称されているが、彼はその時のみならず常時このような馬車に乗っていたのかもしれない。しかし白い馬車に乗っていたのは、ジャーヌツソーニが釈尊の教えに帰依する、まさしくその時のことを象徴すると想像できなくもない。

それはともかくこれら 5 人の「高名な婆羅門」が一括りに取り上げられる経の時点では、彼らはいまだ釈尊に帰依していなかったようであるが、すでにその機は熟していたものと考えられる。

- (1) 象跡喻小経 vol.I p.175
- (2) 大正 01 p.656 上
- (3) vol.V p.004、南伝 5 p.144
- (4) 大正 02 p.200 下
- (5) SN.vol.V p.005、南伝 5 p.145

[4] 次にこれら「高名な婆羅門」たちが個別に登場する経を検討する。数多くの経に登場する筆頭はジャーヌツソーニ婆羅門 (*Jāṇussoṇi brāhmaṇa*) であるから最初に取り上げる。

なおジャーヌツソーニは漢訳経典においては、「生聞婆羅門」と訳されることが多いが、「生聴婆羅門」「生漏梵志」という訳語もある。

[4-1] 後述するように、ジャーヌツソーニ婆羅門は後に釈尊に帰依して優婆塞となったことは確実であるが、まず帰依する以前のジャーヌツソーニが登場する経を紹介する。

前述のように「高名な婆羅門」たちは、列記される経の時点ではまだ釈尊に帰依していなかったものと考えられるが、その機はすでに熟していた。特にジャーヌツソーニは、誤情報

が含まれるとしても、MN.099 *Subha-s.*においては、白い馬車に乗ったジャーヌッソーニが釈尊のおられる方に向かって「パセーナディ王には利得がある。王の領土には如来が住している」とウダーナを誦したとされているから、5人のうちでも特に釈尊の教えにより深い共感をもっていたことが推測される。

実は『中阿含』148「何苦経」<sup>(1)</sup>に登場するジャーヌッソーニもそのような状況にあったのではないかと推測される。この経では、

あるとき世尊は舎衛国の勝林給孤独園に住された。そのとき生聞梵志が正午ごろ世尊のもとにやって来て、「在家者には何が苦であり楽であるのか。また出家者はどうなのか」と尋ねた。世尊は説法された後、「譬えば月の無垢にして虚空界に遊び、一切世の星宿悉くその光明を翳するが如し。是の如く信・博聞・庶幾（希うこと）・無慳貪は、世間の一切の慳、悉く光明を翳施す」という偈を唱えられた。生聞梵志は世尊の所説を聞いて歡喜奉行した。

とされ、この経ではジャーヌッソーニが優婆塞になっていたかどうかはわからないが、これに続く『中阿含』149「何欲経」<sup>(2)</sup>は、

あるとき世尊は舎衛国の勝林給孤独園に住された。そのとき生聞梵志が正午ごろ世尊のもとにやって来て、「利利（クシャトリア）、居士、婦人、偷劫、梵志、沙門はそれぞれ①何を欲し、②何を行じ、③何に立ち、④何に依り、⑤何に終わるのか」と尋ね、世尊はこれについて詳しく説かれた。生聞梵志はこの教えを聞いて仏・法と比丘衆に帰依し、優婆塞となり、世尊の所説を歡喜奉行した。

とされており、ここでははっきりと「三宝に帰依して終身の優婆塞となることを誓った」とされている。第149経はもちろん直前の第148経を意識しているであろうから、第148経ではいまだ優婆塞ではなかったジャーヌッソーニが第149経で優婆塞となったということを表わすであろう。

このようにジャーヌッソーニがいまだ釈尊に帰依していないと想像されるいくつかの経があるのであるが、しかしそれらはすでに釈尊の教えに共感を持っていて、明日にでも優婆塞となるという状況のものばかりということになる。おそらく5人の「高名な婆羅門」たちの中ではジャーヌッソーニがもっとも早くに釈尊に帰依して優婆塞になったのであろう。

(1) 大正01 p.659中、国訳05 p.307

(2) 大正01 p.660下、国訳05 p.311

[4-2] ところで先に紹介したMN.099 *Subha-s.*では、ジャーヌッソーニはすべてが白づくめの馬車に乗っていたとされており、[2-5]においてこの白い馬車つなかりでMN.027 *Cūlahatthipadopama-s.*とその対応漢訳の『中阿含経』146「象跡喩経」、およびSN.045-004とその対応漢訳の『雑阿含経』769を紹介しておいた。

これらは次のような内容をもつ。

MN.027 *Cūlahatthipadopama-s.* (象跡喩小経 vol.I p.175、南伝9 p.314) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのときジャーヌッソーニが世尊に会って帰ってきたピローティカ遊行者 (Pilotika paribbājaka) に逢って世尊が賢者であることを知り、すべてが白づくめの車から降りて、世尊に合掌を差し向け、「南無世尊阿羅漢正等覺者 (namo tassa Bhagavato arahato sammāsambuddhassa)」とウダー

才を唱えた。そしていつかはゴータマにお会いして会話ができようと考えた（*app'eva nāma mayam kadāci karahaci tena bhotā Gotamena saddhiṃ samāgaccheyyāma, app-eva nāma siyā kocid eva kathāsappāpo*）。そこで世尊のところに行き、説法を聞いて優婆塞となった。

『中阿含経』146「象跡喻経」（大正01 p.656上、国訳05 p.297）：あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき卑盧という異学が世尊のもとにやって来た。世尊は彼のために教えを説かれ、彼も世尊のために教えを説いて、その場を立ち去った。ときに生聞梵志が極上の白い馬車に乗り、500人の弟子たちと共に森林に来て、弟子に経書を諷誦させようとしていた。そこへ卑盧がやって来たので、生聞が彼に「瞿曇沙門は智慧を学ぶことを知っているだろうか」と質問すると、彼は「象師が森で大象の跡を見つけ、“極めて大きな象である”と信じるようなものだ」と、世尊の所説が善法であることを四句分別を以て答え、さらに「世尊の教えを聞いて出家した者は禁戒を受持し、知足を行じ、諸根を守護し、五蓋を断じ、離欲して四禅を成就し、解脱に至るであろう」と語った。生聞は「そのとおりだ」と考えた。（そしておそらく世尊のところに行って）優婆塞となった。生聞梵志と卑盧という異学は世尊の所説を聞いて歡喜奉行した。

SN.045-004 (vol.V p.004、南伝16上 p.144)：舍衛城因縁 (Sāvatti nidānaṃ)。そのとき阿難は乞食のために舍衛城に入っており、ジャーヌッソーニ婆羅門がすべてが白づくめの馬車で舍衛城を出るのを見た。人々は「梵乘 (brahmayāna) である」と言った。阿難がそれを報告すると、世尊は八正道が梵乗でもあると説かれた。

『雑阿含』769 (大正02 p.200下、国訳02 p.253)：あるとき世尊は舍衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき阿難は乞食のために舍衛城に入っており、生聞婆羅門がすべてが白づくめの馬車で舍衛城を出るのを見た。人々は善乗であるといった。阿難がそれを報告すると、世尊は八正道を説かれた。

このうち MN.027 *Cūlahatthipadopama-s.*とその対応漢訳の『中阿含経』146「象跡喻経」はこのときジャーヌッソーニは優婆塞となったとするが、SN.045-004と『雑阿含経』769ははっきりしない。しかしSN.045-004と『雑阿含経』769には阿難が登場し、阿難はジャーヌッソーニをジャーヌッソーニとして認識しているようであるから、この時点ではジャーヌッソーニはすでに釈尊に帰依しており、釈尊のところに入りしていたのではないかと考えられる。

なお阿難は乞食の時間帯すなわち午前中に舍衛城にいるときに、ジャーヌッソーニが馬車に乗って舍衛城を出るのを見たというのであるから、ジャーヌッソーニの住所は舍衛城内にあったのであろう。

[4-3] 上記のほか、そのときジャーヌッソーニが「仏法僧の三宝に帰依して優婆塞になった」と明記する経典はたくさんあり、それら経の概要を紹介しておく。なお対応経の中には優婆塞となったとしないものもあるがそれも対応経として紹介する。

MN.004 *Bhayabherava-s.* (怖駭経 vol. I p.016、南伝9 p.023、片山・中部1 p.071)：あるとき世尊は舍衛城の祇樹給孤独園に住された。そのときジャーヌッソーニ婆羅門

が世尊のもとにやって来て、「比丘らが行っている閑林の独居は堪え難い、かえって三昧を得ない比丘の意を奪うものだと思いますが」といった。世尊は「自分もいまだ正覚を得ていない菩薩の時にはそう思った」と答え、しかし身・口・意に清浄であり、煩悩に汚されていなければそのようなことはない。自分は半月の14日、15日、8日に閑林に独居して、四禪を得、宿命智・有情生死智・漏尽智に達した。自分は現法楽住を得、後人を慈愍するがゆえに閑林に独居するのだと話された。ジャーヌツソーニは優婆塞となった。

『増一阿含』031-001 (大正02 p.665中、国訳8 p.389) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき生漏婆羅門が世尊のもとにやって来て、「比丘らが行っている閑居穴処にあることは苦しくて難しい」と言った。世尊は「自分もいまだ仏道を成じていない菩薩の時にはそう思った」と答えられ、「しかし身・口・意が清浄であり、煩悩から離れていれば独居は楽しい、自分は四禪を得、初明、第2明、第3明を得た、自分は独居を楽しみ、衆生を度せんとするからである」と説かれた。生漏婆羅門は優婆塞となった。

『中阿含』147「聞徳経」(大正01 p.658上、国訳05 p.304) : あるとき世尊は舎衛国の勝林給孤独園に住された。そのとき生聞梵志が正午ごろ世尊のもとに来て、「沙門瞿曇の在家や出家の弟子はどうして博聞や誦習をするのか」と尋ねた。世尊は「自ら調御し、息止したいと思うからである。その功德に14種(①得利、②愛念、③財物の無常、④出家学道、⑤不可楽の堪耐、⑥不楽の堪耐、⑦恐怖の堪耐、⑧三悪不善念(欲念、恚念、害念)の不著、⑨四禪、⑩須陀洹、⑪一往来、⑫不還、⑬息解脱、⑭心解脱・慧解脱)がある」と説かれた。生聞梵志はこの教えを聞いて優婆塞となった。

SN.012-047 (vol.II p.076、南伝13 p.112) : 世尊は舎衛城に住された。そのときジャーヌツソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「一切は有である(sabbam atthi)か、一切は無である(sabbam natthi)か」と質問した。世尊はそれは極端であり、如来はこれらの両極端を離れて中道を説くとして、十二縁起を説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.002-002-007 (vol. I p.056、南伝17 p.085) : (直近の前経の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園) あるときジャーヌツソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「どのような因・縁によって悪趣あるいは善趣に生まれるのか」と質問した。世尊は身・口・意の悪行をなせば悪趣に生まれ、身・口・意の善行をなせば善趣に生まれると説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.003-006-055 (vol. I p.158、南伝17 p.257) : (直近の前経の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園) あるときジャーヌツソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「涅槃は現見である(sanditthikam nabbānam)と説かれるがそれはどのような意味か」と質問した。貪瞋癡がなくなれば苦がなくなる、これが涅槃の現見であると説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.003-006-059 (vol. I p.166, 南伝 17 p.269) : (直近の前経の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園) あるときジャーヌッソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「三明を具す婆羅門とはどのようなものか」と質問した。世尊は宿住智を得、天と悪趣を覩見し、生存を尽くす聖者が三明を具すと説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.004-019-184 (vol. II p.173, 南伝 18 p.303) : (直近の前経の仏在処は王舎城の迦蘭陀竹園) あるときジャーヌッソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「死すべきもの (maraṇadhama samāna) で死を恐れないものはない」といった。世尊は「死すべきものにして死を恐れないものがある。欲を離れ、悪をなさず、正法において疑いのないものである」と説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.006-005-052 (vol. III p.362, 南伝 20 p.113) : (直近の前経の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園) あるときジャーヌッソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「クシャトリヤ、婆羅門、居士、女人、賊、沙門はどのようなものを抛り所とするか」などと質問した。世尊は「軍、真言、工芸、子供、刀杖、戒である」などと答えられた。婆羅門は優婆塞となった。

『増一阿含』 037-008 (大正 02 p.714 中, 国訳 09 p.135) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生漏梵志が世尊のもとにやって来て、「利利、婆羅門、国王、盗賊、女人は何を求め、どのような行業があるのでしょうか」と質問した。世尊は「利利は常に鬪訟を好み、梵志は呪術を好み、国王は軍隊や武器に心をくだき、盗族は盗み心にはしり、女性は男性や財宝に貪著するが、比丘は戒徳を具足し、四諦の教えに心をくだき、涅槃に至ろうとする」と説かれた。生漏梵志は国事が忙しいので帰りますといい、仏を三匝して去った。そのとき生漏梵志は仏の所説を歓喜奉行した。

AN.007-005-047 (vol. IV p.054, 南伝 20 p.301) : (直近の前経の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園) あるときジャーヌッソーニ婆羅門が世尊のところを訪れ、「瞿曇は梵行者をほめられるか」と質問した。世尊は私はさまざまな婬欲から離れているから無上正等覚を得たと公言するのでであると答えられた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.010-012-119 (vol. V p.233, 南伝 22 下 p.161) : (直近の前経の仏在処はチャンパー城・ガッガラ池畔) そのときジャーヌッソーニ婆羅門は布薩日に頭を洗い、新しい衣服を着、濡れたクサ草を手にして世尊のところを訪れた。世尊が「今日は何の日ですか」と尋ねると婆羅門は、「今日は捨法 (paccorohaṇi) の日です」と答えた。そこで世尊は聖者の律の捨法 (ariyassa vinaya paccorohaṇi) を説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.010-017-167 (vol. V p.249, 南伝 22 下 p.190) (1) : (直近の前経の仏在処はチャンパー城・ガッガラ池畔) そのときジャーヌッソーニ婆羅門は布薩日に頭を洗い、新しい衣服を着、濡れたクサ草を手にして世尊のところを訪れた。世尊は「今日は何の日ですか」と尋ねると婆羅門は「今日は捨法 (paccorohaṇi) の日です」と答えた。

婆羅門が「聖者の律の捨法とはどのようなものですか」と尋ねるので、世尊は不殺生・不与取・欲邪行などの十善業道を説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

AN.010-017-177 (vol.V p.269、南伝22下 p.216) : (直近の前経の仏在処はパーヴァーの鍛冶工の子のチュンダのアンバ園) あるとき**ジャーヌッソーニ婆羅門**が**世尊**のところを訪れ、「私たち婆羅門は命終した親族血縁者に布施をするが、彼らは布施を受けることができるのか」と質問した。世尊は「地獄に生まれた者は地獄の衆生の食によって生き、畜生に生まれた者は畜生の食によって生き、人に生まれた者は人の食によって生き、天に生まれた者は天の食によって生きるから、彼らには布施を与えることはできない。しかし餓鬼に生まれる者は餓鬼の食によって生き、またこの世の食によって生きるから布施を与えることができる」と答えられた。そこでジャーヌッソーニ婆羅門は「それではそれに相応しない処に生まれなければ布施を受けることができないのですか」と尋ねた。世尊は、「相応する処に生まれたその他の親族が受ける。そのような者がいないということはなく、また布施には果がある」と説かれた。婆羅門は優婆塞となった。

『雑阿含』1041 (大正02 p.272中、国訳03 p.059) : あるとき世尊は王舎城の迦蘭陀竹園に住された。生聞梵志は**世尊**のもとを訪れ、「最近ある親族の者が死にましたが、そのために食を施せば彼は受けることができるでしょうか」と質問した。世尊は「地獄に生まれれば地獄の衆生食、畜生・餓鬼・人中に生まれれば人中の飲食を得るから、あなたが信施した飲食を得ることはできない。しかし餓鬼趣中の1処である入処餓鬼に生まれればあなたの施食を食することができる」と説かれた。そこで生聞梵志が「もし私の親族が入処餓鬼に生まれなければ誰がこれを食するのでしょうか」と尋ねた。世尊は「他の親族の入処餓鬼趣に生まれた者がこれを食するでしょう。もしそのような者がいなくとも信施には福がある」と答えられた。生聞梵志は仏の所説を欢喜し、座より起って去った。

『増一阿含』017-008 (大正02 p.584下、国訳08 p.133) : あるとき世尊は舎衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき**生漏婆羅門**が**世尊**のもとにやって来て、「どのように悪知識や善知識の人を観じたらよいか」と質問した。そこで世尊は「悪知識の人は月が欠けていくように、信、戒、聞、施、智慧がなく、命終したのち地獄に墮ちる。善知識の人は月が満ちていくように、信、戒、聞、施、智慧が増益し、命終したのち善趣に生まれる」と説かれ、「若し人、貪欲有りて瞋恚と癡が尽きずば、善において漸く減ずること有り、猶し月の尽くるに向かうが如し。若し人、貪欲なく瞋恚と癡もまた尽きれば、善において漸く増すこと有り、猶し月の盛満するが如し」と偈を唱えられた。婆羅門は優婆塞となった。

『増一阿含』034-010 (大正02 p.697下、国訳09 p.080) : あるとき世尊は舎衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき**生漏梵志**が**世尊**のもとにやって来て、「どのような因縁や宿行により、人民の類が荒廃するのか」と質問した。世尊は「人民の所行が非法だと荒廃する。即ち①人々が慳貪となること、②風雨による植物の自然災害を受

けること、③人々が互いに諍い競って自らの命を失うこと、④武力によって国が乱れること、⑤困厄疾病によって国土が荒廃することである」と説かれた。この教えを聞いた梵志は歓喜し、世尊に帰依して優婆塞となった。そのとき梵志は瞿曇に言った。

「私は波斯匿王、ビンピサーラ王、ウデーナ王、悪生王、優陀延王に梵福を受けており、この徳を失うのを恐れるから、私が偏袒右肩するときにはその礼を受けてほしい、私が歩行するとき瞿曇に会えば履を脱ぐが、世尊は私の礼を受けてほしい」と。世尊はそれを了解された。彼は優婆塞となった<sup>(1)</sup>。

(1) テキストでは優婆塞となったと2度繰り返されている

『増一阿含』037-009 (大正02 p.714下、国訳09 p.136) : あるとき世尊は舍衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき生漏梵志が世尊のもとにやって来て、「比丘はどのように梵行を修めるのか」と質問した。世尊は「戒律を具足してこれを犯さなければ梵行を修得したことになる。また眼が色を見、鼻が香を嗅ぎ、舌が味を知り、身が細滑(触)を知り、意が法を知っても、識想がなく、想念も起こさず、清浄であることが、梵行を修めたことである」と説かれた。婆羅門はこの教えを聞いて優婆塞となった。

『増一阿含』050-009 (大正02 p.813中、国訳10 p.066) : あるとき世尊は舍衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき生漏梵志が世尊のもとにやって来て、「沙門瞿曇は三世を説かれるが、どのくらいの劫なのか」と質問した。世尊は「過去と未来の劫は恒沙の数の如く、限りがなく数えることができない。また現在の劫も成劫、敗劫があり、恰も器皿が不安定な所があれば壊れやすいようなものである。衆生は無明、結、覆により漂い、今世より後世に至り、後世より今世に至って長夜に苦悩を受ける。それ故にこれを離れるべきである」と説かれた。生漏梵志は優婆塞となった。

『増一阿含』034-010のジャーヌツソーニは世間の目を気にしているのであって、優婆塞とはなっていない出家して比丘となる境地にまでは至っていなかったであろう。

なお以上に紹介した経の中には仏在処を舍衛城以外とするものがあるが、若干の例外を除いて大方は( )内に記したように直前の前経によって推測したものであって、次項で紹介する経などによってもジャーヌツソーニの住所は舍衛城内にあったことが確認される<sup>(2)</sup>。

(1) 対応する『雑阿含経』1040 (大正02 p.272上、国訳03 p.058)はジャーヌツソーニではなく異婆羅門とする。仏在処も王舎城・金師精舎である。

(2) 余談となるが、仏在処を直前の前経で推測することは危険であるということになる。

[4-4] 次にジャーヌツソーニがすでに釈尊に帰依して優婆塞になっている経を紹介する。といってもすべては、釈尊に教えを聞きに行っているという状況から解釈したものであって、経自身に「優婆塞ジャーヌツソーニが云々」と記されているわけではない。この部類には『雑阿含』が多く、前項に掲げた優婆塞となったとする部類には『雑阿含』はないから、ただ単なるレトリック上の問題であって、実際には今までに挙げた経と相違はないのかもしれない。

『雑阿含』095 (大正02 p.026上、国訳03 p.195) : あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとにやって来て、「世尊は『私と

私の弟子に施すとき大果がある。他に施しても大果は得られない』と説かれると聞いたが、それは本当ですか」と質問した。世尊は「それは私を誹謗するものである。人が器を洗うときに余った食物を地に捨ててもその処の衆生をして利樂を得せしめる。まして人に施すにおいてをや。しかし私は『持戒者に施せば果報を得るが、犯戒者では得られない』とは説いている」と教誡され、「黒色であろうが白色であろうが、もし牛が重きを運ぶことができるなら色には関係はない。人も同様であって、刹利・婆羅門・毘舍・首陀羅・旃陀羅の種姓を問わず戒をたもち、梵行を修し、煩惱を離れば阿羅漢であり、このようなものに施せば大果を得る」という偈を唱えられた。生聞婆羅門は仏の所説を聞いて歓喜して去った。

『別訳雑阿含』261 (大正02 p.465下) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聽という婆羅門が世尊のもとにやって来て、「世尊は『自分や弟子への布施は大いに果報があり、他の師や弟子たちへの布施は果報がない』と説かれたと聞いたが、それは本当ですか」と質問した。世尊は「それは虚妄であって私を誹謗するものである。洗鉢の水を施せば虫や蟻などが大福を得る。しかし持戒者に施せば大福を得るが破戒者に施しても福は少ない」と説かれ、一切の布施を讚歎する偈を唱えられた。これを聞いて生聽婆羅門は歓喜奉行した。

『呉魏二録 雑阿含』002 (大正02 p.493中) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとにやって来て、「世尊は『私と私の弟子に施せば大果があるが、他に施せば大果はない』と説かれたと聞いたが、それは本当ですか」と質問した。世尊は「それは私を誹謗するものである。園中に釜の水を捨てても園中の虫がそれによって生きることができる。しかし持戒者に施せば福は大であり、持戒でない者に施せば福は少ない。牛の黒白を見てはならない、人も同じである」と説かれた。生聞婆羅門は頭を仏足につけ、今より仏の持戒に帰すと誓った。

『雑阿含』319 (大正02 p.091上、国訳01 p.251) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとにやって来て、「一切とは何か」と質問した。世尊は「一切とは十二処である。即ち六根と六境を一切と名づく」と説かれた。生聞婆羅門は仏の所説を歓喜奉行した。

『雑阿含』320 (大正02 p.091中、国訳01 p.252) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとにやって来て、「一切有とは何か」と質問した。世尊は「六根・六境・六識・六触・触因縁生の三受が有であり。これが一切有である」と説かれた。生聞婆羅門は仏の所説を歓喜奉行した。

『雑阿含』321 (大正02 p.091中、国訳01 p.252) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとにやって来て、「一切法とは何か」と質問した。世尊は「六根・六境・六識・六触・触因縁生の三受が一切法である」と説かれた。生聞婆羅門は仏の所説を歓喜奉行した。

『雑阿含』771 (大正02 p.201上、国訳02 p.254) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとを訪れて、「彼岸と彼岸でない



ものとは何か」と質問した。世尊は「八邪道は彼岸ではなく、八聖道は彼岸である」と説かれ、「稀に彼岸に渡る者があるが、ほとんどすべての者は此岸に遊ぶ。この正法律においてよく随順する者は、生死の度り難き岸を度る」という偈を唱えられた。生聞婆羅門は仏の所説を歡喜奉行した。

『雜阿含』789 (大正 02 p.204 下、国訳 02 p.266) : あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとを訪れて、「正見とは何か」と質問した。世尊は「正見には世俗の有漏有取のものと、出世間の無漏不取のものがある。前者は善趣に向かい、後者は苦を尽くして苦辺に向かう」と説かれた。生聞婆羅門は仏の所説を歡喜し、座より起って去った。

『雜阿含』1051 (大正 02 p.274 下、国訳 03 p.066) : あるとき世尊は王舎城の迦蘭陀竹林園に住された。そのとき生聞婆羅門が世尊のもとを訪れ、「此岸とは何ですか、彼岸とは何ですか」と質問した。世尊は「殺生は此岸、不殺生は彼岸です。邪見は此岸、正見は彼岸です」と説かれた。生聞婆羅門は仏の所説を歡喜し、座より起って去った。

[4-5] 以上のようにジャーヌッソーニの住所は舍衛城内にあったものと考えられるが、前項で紹介した『雜阿含經』1041と『雜阿含經』1051のみは、その仏在処が王舎城の竹林園である。しかしこのうちの『雜阿含經』1051には「生聞婆羅門」が2カ所に登場するが、脚注では三本ないしは元・明本では「生聞婆羅門」に相当する部分が単に「沙門」となっている。おそらく「生聞婆羅門」とするのは誤伝であろう。とするならば『雜阿含經』1041にも何らかの齟齬が含まれているのではないかと思われる。

[5] 次にポッカラサーティ婆羅門<sup>(1)</sup>を取り上げる。この人は「高名な婆羅門」たちの歸依年を推定する際に役立つ経に登場する。

(1) テキストによっては Pokkharasādi とするものもあるが、ここでは Pokkharasāti に統一する。

[5-1] この婆羅門の、釈尊に歸依して優婆塞になる以前の資料は、5人の「高名な婆羅門」たちが登場する DN.013 *Tevijja-s.*と、話題として取り上げられる MN.099 *Subha-s.*のみである。しかし *Tevijja-s.*ではその弟子のヴァーセッタ (Vāsetṭha) が優婆塞となったとされているから、その師であるポッカラサーティ婆羅門もすでに釈尊の教えに理解があったのではないかとしておいた。

[5-2] このポッカラサーティ婆羅門が釈尊に歸依して優婆塞になったことを記す経がある。DN.003 *Ambaṭṭha-s.*とその対応経である。これらの経の内容は次のとおりである。

DN.003 *Ambaṭṭha-s.* (阿摩昼經 vol.I p.087、南伝 06 p.131) : あるとき世尊はコーサラ国を遊行してイッチャーナンカラという婆羅門村に住された。そのときポッカラサーティ婆羅門 (Brāhmaṇa Pokkharasāti) がウッカッター (Ukkatthā) にいて、そこはパセーナディ王の王領地で (rāia-bhogga)、パセーナディ王より授けられた淨施の拝領地 (raññā Pasenadi-kosalena dinnam rājadāyam brahmadeyya) であった。彼は弟子であるアンバッタという青年婆羅門 (Ambaṭṭha mānava) に世尊が

三十二相を具えているかを確認しに行かせた。しかしアンバッタは世尊に失礼な態度をとったので、ポッカラサーティ婆羅門は翌日に世尊のところを訪ね、世尊の三十二相を確認して優婆塞となった。

『長阿含』020「阿摩昼経」（大正01 p.082上、国訳7 p.283）：あるとき世尊は1,250人の比丘らと共に俱薩羅国を遊行して、伊車能伽羅という婆羅門村に至り、伊車林に住された。このとき沸伽羅娑羅婆羅門が郁伽羅村（Ukkatthā）にいて、この村は波斯匿王が沸伽羅娑羅婆羅門に梵分として与えたものであった。

沸伽羅娑羅は世尊の評判を聞き、弟子の阿摩昼を世尊のもとへ遣わした。阿摩昼は500人の弟子らと一緒に世尊のもとへやって来て非礼な振舞いをした。沸伽羅娑羅は阿摩昼を叱責し、翌朝、自ら世尊のもとを訪れて三十二相を確認した。そして彼は弟子の非礼を謝罪して世尊と比丘らを食事に招待し、優婆塞になった。そして世尊が去って間もなく彼は病気で亡くなった。

支謙訳『仏開解梵志阿毘曇経』（大正01 P.259下）：あるとき世尊は越祇を遊行して鼓車城外の樹下に住された。そこには費迦沙と名づける梵志がおり学問をよくした。その弟子に阿毘曇というものがあり、世尊が来られたことを聞いて三十二相があるかどうか確認しに行き驕慢な振舞いをした。世尊は過去の鼓摩休にまで遡る因縁譚を説かれて彼の驕慢を除かれた。その後、費迦沙とその一族およびその弟子・阿毘曇は優婆塞となったが、費迦沙はその後に命終した。

『根本有部律』「薬事」（大正24 p.033上、国訳23 p.121。チベット訳は「八尾」（1）p.156）：世尊は僑薩羅の人間を遊行して増長聚落の増長林中に住された。ここは勝軍王の施した所であった。そこに聚落主の蓮華茎婆羅門がいて彼には菴没羅子という弟子がいた。蓮華茎婆羅門は世尊が三十二相を具えているかを確認させるために菴没羅子を遣わしたが、彼は種姓を誇って軽慢にふるまい積種を罵った。世尊は甘蔗王からの因縁譚によって彼の耳輪種が婢生種であると語って驕慢を除かれた。（以下は「長阿笈摩戒蘊品中に菴娑娑婆羅門事を説くがごとし」として省略されている）

(1) 八尾史訳註『根本説一切有部律薬事』連合出版、2013年3月

『根本有部律』「雑事」（大正24 p.378中、国訳26 p.277）：世尊は僑薩羅国を遊行して欲梨聚落の園林に住された。そのとき別の村に妙花という婆羅門がいて、勝光大王（波斯匿王）によって常に供養されていた。彼には樹生をはじめとする500人の弟子があり諸要經典を学んでいた。妙花婆羅門は「世尊が来た」と聞いて、弟子の樹生を派遣して、世尊が三十二相の莊嚴身を具えているかどうかを確かめさせた。そのとき樹生は高慢な態度をとった。世尊は甘蔗王からの因縁譚によって彼の驕慢を除かれた。こののち妙花婆羅門は世尊を翌朝の食事に招待した。世尊は阿難陀に命じて、この聚落にいる比丘らを食堂に集め、婆羅門の食事を受けたのち、「祭祀は火を最となし、初頌は論中の最たり。人中には王を最となし、衆流には海を最となす。十方世界の中、凡聖にては仏を最となし、布施をなす所の者は必ずやその利を獲ん」という偈を唱えられた。このとき比丘らの中に、音を立てて食べている者がいたので、妙花婆羅門が彼らを皮肉った。世尊は高慢な彼に教えを説かれた。妙花婆羅門はその教え

を聞いて、三宝に帰依して優婆塞となった。彼が去って間もなく、世尊は比丘らに「頌を説くとき食してはならない」と、施頌時食禁の制を制定された。

これらの経もまた仏在処をイッチャーナンカラとするとしてよいであろう。『長阿含』020「阿摩昼経」の「伊車能伽羅」はその音写であることはいまでもないが、『根本有部律』「雑事」の「欲 (icchā) 犁 (naṅgala) 聚落」はその意識であり、『根本有部律』「業事」の「増長聚落」もしかりである。『仏開解梵志阿毘經』の「鼓車城」は厳密にトレースできないがイッチャーナンカラの訳語に相違なからう。先述のようにこのイッチャーナンカラは舍衛城からさほど遠くない東方にあった。

そしてここはポッカラサーティ婆羅門がパセーナディ王から授けられた梵施の土地だとされているから、彼はここを住所としていたのである。「仏開解梵志阿毘經」はその国を越祇とするが、越祇がヴァッジ国を意味するとするなら、今までに紹介したたくさんの経から、イッチャーナンカラがヴァッジ国に属していたとは考えられない。

なお『長阿含』020「阿摩昼経」と『仏開解梵志阿毘經』はポッカラサーティが優婆塞となった直後に命終したとしている。

[5-3] 次にこのポッカラサーティがすでに釈尊に帰依して優婆塞になっている状態を記した経を紹介する。ただし直接に登場するのではなく話題として登場するのみである。

DN.004 *Soṇadaṇḍa-s.* (種徳経 vol.I p.111, 南伝6 p.165) : あるとき世尊はアンガ国のチャンパーに遊行され、ガッガラー蓮池の岸辺に住された。そのときソーナダダ婆羅門がチャンパーに住んでおり、この地は王領地 (*rāja-bhogga*) で、マガダ王セーニヤ・ビンピサーラより授けられた淨施の拝領地 (*raññā Māgadheṇa Seniyena Bimbisārena dinnam rāja-dāyam brahma-deyyam*) であった。ソーナダダ婆羅門は世尊に会いに行こうとしたが、ちょうどそこに来ていた500人の婆羅門たちが世尊こそ会いに来るべきだと制止した。彼は「世尊は衆の師であり、マガダ王ビンピサーラやコーサラ王パセーナディ (Pasenadi) 、ポッカラサーティ婆羅門とその子や妻等が共に帰依し、彼らに尊敬されている」と説得して彼らとともに会いに行った。ソーナダダ婆羅門は優婆塞となった。

『長阿含』022「種徳経」 (大正01 p.094上, 国訳07 p.323) : あるとき世尊は鴛伽国を1,250人の比丘らと共に遊行して、瞻婆城の伽伽池の側に住された。そのとき種徳という婆羅門が瞻婆城に住していて、その城は波斯匿王が彼に封じて梵分としたところであった。種徳婆羅門は世尊がやって来られたことを聞いて会いに行こうとしたが、500人の婆羅門たちは沙門瞿曇の方から会いに来るべきだと反対した。しかし彼は、「瞿曇は波斯匿王や瓶沙王に供養され、沸伽羅婆羅婆羅門、梵婆羅門、多利遮婆羅門、鋸齒婆羅門、首迦摩納都耶子にも供養され、釈迦族、俱利、冥寧、跋祇、末羅、酥摩の人々にも尊崇されている。また沙門瞿曇は波斯匿王や瓶沙王、沸伽羅婆羅婆羅門らに三歸五戒を授けており三十二相を具足している。私こそ行くべきである」と説得して、500人の婆羅門も一緒に世尊を訪ねた。そして世尊の教えを受けた種徳婆羅門は優婆塞となった。

以上の経はソーナダダ婆羅門が主人公である。そして次の経はクータダダ婆羅門が主

人公であるが、経の状況はよく似ているというよりもそっくりであり、経番号もつながっているから、聖典の編集者たちはこれらの経典があい関連し合っていることを意識していたのであろう。

DN.005 *Kūṭadanta-s.* (究羅檀頭経 vol.I p.127、南伝 6 p.189) : あるとき世尊はマガダ国を遊行して、カーヌマタなる婆羅門村 (Khānumata Magadhānam brahmana-gāma) のアンバラッティカー園 (Ambalatthikā) に住された。この地は豊かでマガダ国のピンピサーラ王から授けられた梵施の土地であった。そのときクータダント婆羅門<sup>(1)</sup> が世尊に会いに行こうとしたが、多くの婆羅門たちが「あなたはマガダ王セーニヤ・ピンピサーラやポッカラサーディ (Pokkharasādi) 婆羅門に尊敬されている。沙門ゴータマこそあなたのもとに来るべきである」と反対した。クータダント婆羅門は「沙門ゴータマは若いけれども三十二大人相を具足して、マガダ王ピンピサーラやコーサラ王パセーナディ (Pasenadi)、ポッカラサーディ婆羅門とその子や妻子等が共に帰依し、彼らに尊敬されている。私の方から行くのが相応しい」と反論し、会いに行つて優婆塞となった。

『長阿含』023「究羅檀頭経」(大正 01 p.096 下、国訳 07 p.331) : あるとき世尊は 1,250 人の比丘らと共に俱薩羅国の人間を遊行して、佉婁婆堤婆羅門村 (Khānumata) の北にある尸舎婆林に止宿された。この村には究羅檀頭という婆羅門がいて、この村は波斯匿王が梵分として彼に与えた村であった。究羅檀頭は祭祀・祀具のことを尋ねようと世尊に会いに行こうとしたが、これを知った 500 人の婆羅門たちは「あなたは衆の指導者であり、波斯匿王、瓶沙王」に尊敬されている。彼の方から会いに来るべきだ」と反対した。これに対して究羅檀頭婆羅門は、「彼も衆の指導者であり、波斯匿王、瓶沙王や洩伽羅婆羅婆羅門、梵婆羅門、多利遮婆羅門、種徳婆羅門、首伽摩納兜耶子に尊敬され、洩伽羅婆羅婆羅門に三帰五戒を授け、若くして出家して三十二相を具えている。私の方が会いに行くべきだ」と反論した。世尊に会った究羅檀頭婆羅門は大祀について尋ね、説法を聞いた彼は優婆塞となり、翌日の食事を招待して四諦の教えによって法眼浄を得、さらに 7 日の食事を招待して、間もなく病を得て命終した。

次の経の主人公はチャンキン婆羅門であるが、これも上記の経と状況が似ている。

MN.095 *Caṅki-s.* (商伽経 vol.II p.164、南伝 11 上 p.217、片山・中部 4 p.423) : あるとき世尊はコーサラ国を遊行して、オーパサーダという婆羅門村 (Opasāda nāma brāhmanagāma) の北方の天林沙羅樹園 (devavana sālavana) に住された。その村は豊かでコーサラ王のパセーナディからチャンキン婆羅門に梵施された土地であった。そのときチャンキン婆羅門 (Caṅkin brāhmana) が世尊に会いに行こうとしたが、多くの婆羅門たちが「あなたはコーサラ王・パセーナディ王やポッカラサーティ (Pokkharasāti) 婆羅門から恭敬尊重されている。沙門ゴータマが来るべきである」と反対した。しかしチャンキン婆羅門は、「沙門ゴータマは年若いけれども三十二相を具足して、マガダ国・ピンピサーラ王 (Bimbisāra)、コーサラ国・パセーナディ王や、ポッカラサーティ婆羅門がその妻子と共に生涯にわたり帰依している。私

の方から行くのが相応しい」と反論して、会いに行った。このときカーパティカという頭を剃った16歳の青年婆羅門（Kāpaṭhiko nāma māṇavō daharo vuttasiro soḷasavassuddesiko jātiyā）が世尊と年長の婆羅門との会話中に割り込んだので、世尊は彼を呵責された。チャンキン婆羅門はこれを取りなした。カーパティカは教えを聞いて優婆塞となった。（カーパティカはバーラドヴァージャよ、と語りかけられている）

これらの経ではポッカラサーティが登場するわけではなく話題に上るだけであるが、すでに釈尊に帰依した婆羅門の代表者とされている。前項 [4-2] に紹介した、彼が優婆塞となったとする経のうち『長阿含』020「阿摩昼経」と『仏開解梵志阿毘曇経』はその直後に彼は命終したとされているのであるが、しかし先で紹介した経の中では彼はまだ生存しているように記されている。もしこれらの経をそのまま信じるとすれば、上記で紹介した経はポッカラサーティが釈尊に帰依してから程なくして命終するまでの間のことであったということになる。

また最後の MN.095 *Caṅki-s.*の主人公であるチャンキン婆羅門は「高名な婆羅門」の1人に数えられるチャンキン婆羅門であろうが、この経はおそらくその弟子であったカーパティカ青年婆羅門が釈尊に帰依して優婆塞になったとするのみで、チャンキン自身がどうしたかについてはふれられていない。しかし他の婆羅門たちの制止を振り切って釈尊に会いに行き、カーパティカ青年婆羅門と釈尊の間を取りなしたという文脈からは、彼はその時に、あるいは遠からずして釈尊に帰依し優婆塞になったと解釈してよいであろう。そしてこのときすでにポッカラサーティ婆羅門は釈尊に帰依しているとされているのであるから、もしチャンキン婆羅門が後に優婆塞になったとしても、ポッカラサーティ婆羅門が優婆塞になったよりも後であったということになる。

なおここに取り上げた DN.004 *Soṇadaṇḍa-s.*とその対応経である『長阿含』022「種徳経」、ならびに DN.005 *Kūṭadanta-s.*とその対応経である『長阿含』023「究羅檀頭経」の説時は、【研究ノート1】「釈尊のアンガ（*Aṅga*）国訪問年の推定」<sup>(2)</sup>において、釈尊52歳＝成道18年ころのことであったとしている。これらの年次はソーナダダ婆羅門とクータダダ婆羅門が釈尊に帰依した年代を表わす。

ところで DN.004 と『長阿含』022の仏在処はアンガ国のチャンパーであるが、DN.005はマガダ国のカーヌマタなる婆羅門村、その対応経である『長阿含』023はコーサラ国のカーヌマタなる婆羅門村としている。一方はマガダ国とするに對しもう一方ではコーサラ国とするのであるが、原始仏教聖典においてはカーヌマタなる地名はここにしか出てこず、はたしてどちらが正しいかわからない。もし DN.004がアンガ国、DN.005がコーサラ国であるとすると、この両経の説時が同じとするのは同時期に釈尊がアンガ国とコーサラ国にいたことになって問題があるが、アンガ国とマガダ国なら許容の範囲であろう。まさしくご都合主義的との譏りを免れ難い解釈であるが、カーヌマタはパーリにしたがってマガダ国にあった村としておきたい。

また同じような状況を記すチャンキン婆羅門を主人公とする MN.095の仏在処はコーサラ国のオーパサーダという婆羅門村とする。そうすると前記2経とは同じ年であったという可

能性はないが、同じような状況であったことを考えると、その前後の年ではなかったであろうか。そうするとわれわれの「年表」では、アンガ国のチャンパーにおいて雨安居を過ごされた翌年の釈尊 53 歳の雨安居は舍衛城で過ごされたことになっているから、MN.095 の説時はこの年としておいたらいかがであろうか。そうするとチャンキン婆羅門が優婆塞になったのは、釈尊 53 歳＝成道 19 年ころということになる。

そしてこの結論によるなら、ソーナダダ婆羅門とクータダダ婆羅門およびチャンキン婆羅門が優婆塞になったときにはすでにポッカラサーティ婆羅門は釈尊に帰依していたのであるから、ポッカラサーティ婆羅門が釈尊に帰依して優婆塞になったのは、釈尊 52 歳＝成道 18 年よりも以前 (DN.005 *Kūṭadanta-s.* の論考) ということになる。しかもポッカラサーティは優婆塞となってからそれほど長期間は存命していなかったとするなら、その帰依年代は釈尊 52 歳＝成道 18 年をそれほど遡らないということになる。

(1) この経と次の経に登場するクータダダ婆羅門も有名な婆羅門の 1 人であって、この他に *Jātaka*546 *Mahāummagga-j.*(vol.VI p.329)、*Buddhacarita* (21-09)、『仏所行讃』(大正 04 p.040 上) に名前がでる。

(2) 森章司著、「モノグラフ」第 19 号 2014 年 9 月 p.016

[6] 次にジャーヌッソーニ婆羅門とポッカラサーティ婆羅門以外の「高名な婆羅門」について調査する。残りは①チャンキン婆羅門 (Caṅki) と、②タールッカ婆羅門 (Tārukkha)、⑤トーデッヤ婆羅門 (Todeyya) の 3 人であるが、これらについてはほとんど情報がない。

[6-1] まずチャンキン婆羅門 (Caṅki) であるが、この人が単独で登場するのは前項の [4-3] に紹介した MN.095 *Caṅki-s.* のみである。この経の仏在処はコーサラ国のオーパサーダという婆羅門村であるが、ここはコーサラ国王パセーナディからチャンキン婆羅門に梵施された土地であるとされているから、チャンキン婆羅門の住所はここであったということになる。オーパサーダ村がどのあたりにあったのかわからないが、この婆羅門が 5 人の「高名な婆羅門」のうちの 1 人とするなら、5 人のバラモンの住所は舍衛城ないしはその近郊と考えられるから、ここも舍衛城の近郊であったであろう。

なおこの経では釈尊に帰依して優婆塞になったのは弟子の 1 人であるカーパティカ青年婆羅門であるが、その師であったのがチャンキン婆羅門で、彼は他の婆羅門たちの制止を押し切って釈尊に会いに行ったのであるから、彼自身が釈尊に帰依して優婆塞になったのはそう遠くなかったと考えてよいのではなかろうか。もちろんこの経の時点でポッカラサーティ婆羅門はすでに釈尊に帰依しているのであるから、チャンキン婆羅門が優婆塞になったのはポッカラサーティ婆羅門よりも後ということになる。

[6-2] 次にトーデッヤ婆羅門である。次の経はトーデッヤが死後に犬に生まれ変わっていたとされている。

『中阿含』170「鸚鵡経」(大正 01 p.703 下、国訳 06 p.088) : 世尊は舍衛国・勝林給孤獨園に住された。そのとき世尊は乞食のため舍衛城の鸚鵡摩納都提子(スバ・トーデッヤプッタ)の家を訪かれると、彼は用事があった留守だった。このとき彼の白い犬が床で餌を食べていたが、世尊を見かけると吠えた。世尊は「そのように吠えるな。(汝は生前に人を)譏ったので吠える(犬に)なったのだ」と諭された。する

と犬は大いに怒りながらも、床から下りて木材の陰にしゅんとして伏せた。

後に鸚鵡摩納都提子が家に戻ってそれを知ると、彼は瞋恚を懐いて世尊のもとへ行き、このことをもってなじった。世尊は「白い犬の前世は**汝の父である都提**である」と告げると、彼はますます怒って「我が父は布施を行い、大斎祠を行い、梵天に生まれているはずだ」と反論した。そこで世尊は「もしそれを確かめたいなら、家に帰ってあなたの父親が隠しておいた金銀宝石のあり場所を尋ねてみなさい」と諭された。彼は家に帰って白犬に尋ねると自分の知らなかった金銀宝石のあり場所を示したので喜び、こうして鸚鵡摩牢兜羅子は世尊に帰依し、短命に生まれたり長命に生まれたりする過去の業因についての説法を聞いて**優婆塞**となった。

求那跋陀羅訳『鸚鵡経』（大正01 p.888中）：あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき**世尊**は舍衛国に乞食されて**鸚鵡摩牢兜羅子**の家に至られたが留守であった。このとき**白狗**が世尊に吠え立てたので、世尊は「止めよ、汝はもと吟哦（梵志乞食の音）だったのだ」というと、しゅんとして床下に隠れた。帰ってきた鸚鵡摩牢兜羅子がこれを聞くと怒って、世尊のところに行き、「父は施与を行い、火に事えて梵天上に生まれているはずだ」と抗議した。世尊は「汝の父親は増上慢のために狗に生まれた。嘘だと思ふなら家に帰って狗に父の遺財がどこにあるか聞いてみなさい」と諭された。遺財は狗がいた床下の脚の下の地中から見つかった。喜んだ鸚鵡は祇樹給孤独園に世尊を訪ね、悪業によって苦果を得、善業によって楽果を得るとの説法を聞いて**三宝に帰依して優婆塞**となった。鸚鵡摩牢兜羅子は世尊の所説を歡喜して去った。

天息災訳『分別善惡報応経』（大正01 P.895中）：あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき世尊は舍衛国に乞食に入り、**兜儂野子輪迦長者**の家に至られると、**商佉**という名の**犬**が吠え立てた。世尊が「お前は未だ悟っていないから吠えるのだ」というと犬は梅檀座の下に逃げ込んだ。なぜ犬が梅檀座の下にいるのかを知った輪迦長者は祇樹給孤独園を訪れて、「私の父は日頃火天や鬼神を祀っていたから梵天に生まれているはずだ」と抗議した。世尊は「疑うなら家に帰って商佉に尋ねてみなさい」と答えられた。長者は家に帰って商佉に「もしお前が私の父の兜儂野なら銅盤から肉を食べてはならない」と言うのと食べた。次に「もしお前が私の父の兜儂野なら奇異を顯しなさい」というと、犬は梅檀座の下から金銀珍宝を掘りだした。これに見た長者は喜んで世尊のところに行き**一心に帰依**した。世尊は長者の求めに応じて、因果善惡の報応を詳しく説かれた。兜儂野子輪迦長者と比丘らは歡喜踊躍して世尊の前から退いた。

失訳『兜調経』（大正01 p.887中）：あるとき世尊は舍衛国に住された。そのとき**兜調**という**婆羅門**がありその子を**谷**といった。兜調は人を苦しめ罵詈することを好んでいたの死んでその家の犬に生まれ**驪**と名づけられた。あるとき世尊が谷の外出中にその家の門を通りかかると白犬が吠え立てた。世尊が「お前はいつも手を挙げ吠え立てたので犬に生まれたのだ」というと、犬は床下に逃げ込んだ。谷が還って家人からこのことを聞くと世尊のところに行って、「父は在世の時に道経を明らかにしていた

ので犬にはならない」と抗議した。世尊が「疑うなら家に帰って、我が父なら珍宝のあるところを示せといいなさい」と告げられた。犬はその場所を示した。谷は喜んで世尊のところに行き、人にはなぜ寿者と不寿者があるのかと質問した。世尊は詳細に説かれた。これを聞いた谷は五戒を行う優婆塞となった。世尊は後世の人がこの経が読誦されるのを聞けば、皆、弥勒菩薩の弟子となるであろうと説かれた。

このようにこの経は鸚鵡摩訶都提子が主人公であり、その父親のトーデッヤは白い犬に生まれ変わっていたとされている。鸚鵡は「我が父は布施を行い、大斎祠を行い、梵天に生まれているはずだ」と主張しているから、この経による限りトーデッヤは釈尊に帰依して優婆塞にはならず死んだのかもしれない。そうでなければ仏典が犬に生まれ変わったなどという否定的な叙述はしないであろう。

[6-3] ところでこの経によれば、このとき鸚鵡は優婆塞になったとされているのであるが、鸚鵡すなわちトーデッヤの子・スバが優婆塞になったことは、先に紹介した MN.099 *Subha-s.* = 『中阿含』152「鸚鵡経」にも記されていた。

そしてこの他にもスバが優婆塞となったとする経がある。

DN.010 *Subha-s.* (須婆経 vol. I p.204、南伝6 p.291、片山・長部2 p.275) : 世尊が般涅槃されて間もないころ<sup>(1)</sup>、阿難は舎衛城の祇樹給孤独園にいた。ときにトーデッヤの子 (Todeyyaputta) であるスバという若い婆羅門 (māṇava) は所用で舎衛城に来ていた。彼はある青年を遣わして阿難を呼び寄せたが、阿難は「薬を飲んだばかりなので明日なら行ける」と告げた。翌朝、阿難はチェータカ比丘 (Cetaka bhikkhu)<sup>(2)</sup> を随従沙門としてスバのもとを訪れ、「世尊は戒と定と慧を称讃され、人々をこの教えによって導かれた」と説いた。彼はこれを聞いて優婆塞となった。

(1) 片山 p.275 の註では「入滅後わずか1ヵ月のころ」とする。

(2) チェータカなる比丘はこの経にしか登場しない。

MN.135 *Cūḷakammavibhaṅga-s.* (小業分別経 vol. III p.202、南伝11下 p.275、片山・中部6 p.188) : 世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。ときにトーデッヤの子であるスバという若い婆羅門が世尊のもとにやって来て、「人によっては短命であったり長寿であったりするのはどうしてか」と質問した。世尊は「諸の衆生は業を自己とし、業の相続者であり、業を胎とし、業に縛られ、業を所依としている。業は衆生たちを分別し、優劣ならしめる」と説き、さらに彼の求めに応じて、「殺生者は悪趣に墮し、再生しても慈心なき故に短命であり、不殺生者は善趣に生まれ、再生しても慈心あり、慈愍の情あるが故に長寿である。衆生を悩害しない者は無病であり、忿怒なき者は端正であり、嫉妬心なき者は権勢者となり、施与する者は富裕者となる」などと広説された。彼はこの教えを聞いて優婆塞となった<sup>(1)</sup>。

(1) 先に紹介したように、この経にはトーデッヤが死後に白い犬に生まれ変わったとする漢訳の対応経が数経あるが、今のこの経にはこのエピソードはない。このエピソードがない経には瞿曇法智訳『仏为首迦長者説業報差別経』(大正01 p.891上)がある。この経は世尊が初提耶子首迦長者に「善悪業報差別法門」を説かれたとし、心に淨信を得た長者は世尊に舎婆提城の父初提長者のところに行って、父ならびに一切衆生をして長夜に安樂ならしめてくださいと願い出て許され、世尊の所説を聞いて心に大歡喜して頂礼して去った、とされて



いる。

である。

このようにトーデッヤの息子であるスバが優婆塞となったという経はいくつもあるのであるが、これらの要点だけを摘記してみると次のようになる。

*MN.099 Subha-s.*

仏在処：舎衛国の祇樹給孤独園

注意事項：ジャーヌッソーニ婆羅門が釈尊の方角に合掌を差し向けた。他の高名婆羅門も存命。

『中阿含』152「鸚鵡経」

仏在処：王舎城の迦蘭陀竹園

注意事項：商伽梵志・生聞梵志・弗袞袞婆羅梵志およびスバの父親の都題は亡くなっていた

『中阿含』170「鸚鵡経」

仏在処：舎衛城の祇樹給孤独園

注意事項：スバの父親の都題は亡くなって白い狗に生まれ変わっていた

求那跋陀羅訳『鸚鵡経』

仏在処：舎衛城の祇樹給孤独園

注意事項：スバの父親の都題は亡くなって白い狗に生まれ変わっていた

*DN.010 Subha-s.*

仏在処：－

注意事項：世尊が般涅槃されて間もないころ  
アーナンダが登場する

*MN.135 Cūḷakammavibhaṅga-s.*

仏在処：舎衛城の祇樹給孤独園

注意事項：－

以上のようにスバが優婆塞となったときの仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園が多い。『中阿含』152「鸚鵡経」のみ王舎城とするが、これはスバが所用で王舎城に来ていたとする。

次にスバが優婆塞となった時期であるが、*MN.099 Subha-s.*はジャーヌッソーニをはじめとする高名な婆羅門は生存中であつたと思われるが、『中阿含』152「鸚鵡経」と『中阿含』170「鸚鵡経」と求那跋陀羅訳『鸚鵡経』はトーデッヤなどの高名婆羅門は亡くなっていたと理解してよいであろう。また *DN.010 Subha-s.*は釈尊滅後とする。*MN.135 Cūḷakammavibhaṅga-s.*ははっきりしない。

このようにスバが優婆塞となった時期ははっきりしないが、少なくともその父親が亡くなった後ということになるのではなかろうか。しかし *DN.010 Subha-s.*以外に釈尊が登場するのであるから、釈尊入滅後ということはない。スバはトーデッヤの息子なのであるから、ジャーヌッソーニ婆羅門などよりも1世代後の人物である。したがってスバが優婆塞となったのは、ジャーヌッソーニ婆羅門やポッカラサーティ婆羅門などが釈尊に帰依した釈尊48歳よりも20年ほど後と仮定しておいてもよいかもしれない。

なお *MN.099 Subha-s.*と『中阿含』152「鸚鵡経」は対応経であるが、その時代設定は矛

盾する。しかし上記のようなスバの優婆塞となった年代からすると、*MN.099 Subha-s.* 情報が過っているといわざるをえないであろう。先の [3-3] においてはこの検討を宿題としてあったのであるが（ただしこの結論を先取りして述べておいた）、これをもって結論とする。

なお『長阿含』022「種徳経」、『長阿含』023「究羅檀頭経」には首迦摩納兜耶子が登場するが、これは父親のトーデヤをさすであろうことは [2] に記した。

(1) 片山・長部 2 p.320、中部 4 p.520

[6-4] 5人の「高名な婆羅門」たちのうちの残る1人である②タールッカ婆羅門 (Tārukkha) が個人として登場する原始仏教聖典はない。これら5人が一括してあげられる経の時点では、5人は釈尊に帰依していたとはされていないから、タールッカ婆羅門は生涯釈尊に帰依するということはなかったのかもしれない。しかし *DN.013 Tevijja-s.* とその対応経では、その弟子であるバーラドヴァージャが釈尊に帰依したとされているから、その師であるタールッカが釈尊の教えに冷淡であったとは考えられないことはすでに [2-2] において記した。したがって優婆塞になったけれども経に記されるほどの事績がなかったとも理解できる。

[7] 以上、5人の「高名な婆羅門」たちに関する原始仏教聖典、すなわちわれわれのいうA文献の記述を紹介してきた。これら5人がわれわれのいう後期の原始仏教聖典すなわちB文献に登場しないわけではないが、これはその都度註記したもののみであって、その他に取り上げるべきものはない。

[7-1] そこで以上に紹介した情報から明らかになった事項と、これら5人の「高名な婆羅門」たち、すなわち①チャンキン婆羅門 (Caṅkī)、②タールッカ婆羅門 (Tārukkha)、③ポッカラサーティ婆羅門 (Pokkharasāti)、④ジャーヌッソーニ婆羅門 (Jāṇussoṇi)、⑤トーデヤ婆羅門 (Todeyya) たちの釈尊に帰依して優婆塞になった年代を考察しよう。

(1) 5人の「高名な婆羅門」たちのうち、ジャーヌッソーニ婆羅門の住所は舎衛城であり、ポッカラサーティ婆羅門の住所は舎衛城近郊のイッチャーナンカラで、チャンキン婆羅門の住所もこれまた舎衛城近郊のオーバサーダという婆羅門村であった。他の2人のバラモンの住所ははっきりしないが、彼らの住所も舎衛城ないしはその近郊であったであろう。

(2) これら5人の「高名な婆羅門」たちは、*DN.013 Tevijja-s.*、*MN.098 Vāseṭṭha-s.* = *Suttanipāta 003-009*、*MN.099 Subha-s.*、『中阿含』152「鸚鵡経」の時点ではいまだ釈尊に帰依し、優婆塞になっていなかった。しかしこのうちの③ポッカラサーティ婆羅門と②タールッカ婆羅門の内弟子が釈尊に帰依しているから、彼らはすでに釈尊の教えに sympathy を有していたものと考えられる。

(3) 彼らの中で真っ先に釈尊の教えに帰依して優婆塞になったのはジャーヌッソーニ婆羅門であったと考えられる。ジャーヌッソーニの住所は舎衛城であったから、ジャーヌッソーニ婆羅門の帰依は釈尊が初めて舎衛城を訪れられ、祇園精舎を寄進された釈尊48歳=成道14年の雨期よりも後のことであったであろう。それ以前に彼が釈尊のことを知る機会はなかったはずだからである。

- (4) チャンキン婆羅門が釈尊に帰依したとする記事を記すのは *MN.095 Caṅki-s.* であるが、ここではポッカラサーティ婆羅門はすでに釈尊に帰依していたとされている。したがってポッカラサーティ婆羅門の帰依はチャンキン婆羅門の帰依よりも前であった。なおポッカラサーティ婆羅門は釈尊に帰依してから程なくして命終したとされている。すなわちポッカラサーティの優婆塞としての生存期間はそれほど長くなかったということになる。
- (5) このポッカラサーティ婆羅門が優婆塞として生存していた期間に釈尊に帰依した婆羅門は先のチャンキン婆羅門を筆頭として、ソーナダダ婆羅門とクータダダ婆羅門であった。ソーナダダ婆羅門とクータダダ婆羅門が釈尊に帰依したことを記録する経は *DN.004 Soṇadaṇḍa-s.* とその相応漢訳の『長阿含』022「種徳経」、ならびに *DN.005 Kūṭadanta-s.* とその相応漢訳の『長阿含』023「究羅檀頭経」であって、前者はアング国のチャンパーを仏在処とすることから、われわれはその説時を釈尊 52 歳＝成道 18 年と考えている。そして *DN.005 Kūṭadanta-s.* とその相応漢訳の仏在処をマガダ国のカーヌマタと理解するなら、これも同じ年であったと考えてよいであろう。しかしながらその状況が酷似する *MN.095 Caṅki-s.* は、仏在処を舎衛城近郊のオーパサーダという婆羅門村とするから、地理的な関係からするとこれを同じ年とすることはできない。したがってこれはその翌年のことであったとすると、チャンキン婆羅門が釈尊に帰依したのは釈尊 53 歳＝成道 19 年ころということになる。
- (6) ポッカラサーティ婆羅門はこのチャンキン婆羅門よりも前に釈尊に帰依していたのであるから、その帰依は釈尊 53 歳＝成道 19 ころよりも以前ということになる。そしてそれよりも前にジャーヌッソーニ婆羅門が釈尊に帰依したのであるから、ジャーヌッソーニの帰依年はさらに遡ることになる。しかしながらそれは釈尊の最初の舎衛城訪問である釈尊 48 歳＝成道 14 年の雨期よりも前には遡らない。このように考えるとジャーヌッソーニ婆羅門が釈尊に帰依したのはその最初の舎衛城訪問の年すなわち釈尊 48 歳＝成道 14 年の雨安居中ないしは安居明けのこととしてよいのではなかろうか。ジャーヌッソーニの住所は舎衛城であり、そのときジャーヌッソーニは全体が白づくめの馬車で舎衛城周辺を動き回っていたようであるから、ジャーヌッソーニの帰依は釈尊 48 歳＝成道 14 年の雨安居明けのことであったとしておこう。
- そしてポッカラサーティはその翌年の釈尊 49 歳＝成道 15 年に釈尊に帰依したのではなかろうか。われわれはこの年の釈尊の雨安居地は、ポッカラサーティの住所であったイッチャーナンカラであったと考えている。
- (7) ポッカラサーティ婆羅門は釈尊に帰依してから程なくして亡くなった。しかしチャンキン婆羅門が釈尊に帰依した釈尊 53 歳＝成道 19 年ころにはまだ生存していた。そしてその翌年に亡くなったと仮定すると、ポッカラサーティ婆羅門が亡くなったのは釈尊 54 歳＝成道 20 年ころということになる。すなわちポッカラサーティ婆羅門は釈尊 49 歳＝成道 15 年に釈尊に帰依して、釈尊 54 歳＝成道 20 年ころに亡くなったということになる。ポッカラサーティは釈尊に帰依してから程なくして亡くなったとされるがそれは 5 年後ということになる。

- (8) 5人の「高名な婆羅門」のうちの1人であるトーデッサ婆羅門は終生釈尊に帰依しなかったものと考えられる。
- (9) この息子のスバは釈尊の優婆塞となったが、その時機はトーデッサ婆羅門の死後であって、ジャーヌッソーニ婆羅門などが釈尊の教えに帰信した約20年後であった。釈尊は70歳＝成道36年の雨安居を舍衛城で過ごされているから、このころであったとしておきたい。
- (10) 残されたタールッカ婆羅門が個人として登場する経はなく、5人の「高名な婆羅門」の1人として登場するのみである。彼らが列挙される経の時点では、5人は釈尊に帰依していたとはされていないから、タールッカ婆羅門は生涯帰依しなかったのかもしれない。しかしその内弟子パーラドヴァージャは帰依したのであるから、その師であるタールッカが釈尊の教えに冷淡であったとは考えられない。優婆塞になったけれども経に記されるほどの事績がなかったとも理解できる。

以上の結論をもとに5人の「高名な婆羅門」を中心に、その周辺の事項を合わせて年表に作ってみると次のようになる。事項にはこの典拠になる経典名も記しておいた。[ ]内は仏在処である。

年齢	成道	事 項
48	14	[舍衛城] ジャーヌッソーニ婆羅門が釈尊に帰依する。(MN.027 <i>Cūlahatthipadopama-s.</i> 、『中阿含』146「象跡喩経」、『中阿含』149「何欲経」他)
49	15	[コーサラ国イッチャーナンカラ] ポッカラサーティの弟子であるヴァーセッタ (Vāsetṭha) とタールッカの弟子であるパーラドヴァージャ (Bhāradvāja) が釈尊に帰依する。(DN.013 <i>Tevijja-s.</i> 、MN.098 <i>Vāsetṭha-s.</i> 、 <i>Suttanipāta</i> 003-009、『長阿含』026「三明経」) ポッカラサーティ婆羅門が釈尊に帰依する。(DN.003 <i>Ambaṭṭha-s.</i> 、『長阿含』020「阿摩昼経」、「仏開解梵志阿闍経」)
52	18	[アンガ国チャンパー] ソーナダダ婆羅門が釈尊に帰依する。(DN.004 <i>Soṇadaṇḍa-s.</i> 、『長阿含』022「種徳経」) [マガダ国カーヌマタ] クータダダ婆羅門が釈尊に帰依する。(DN.005 <i>Kūṭadanta-s.</i> 、『長阿含』023「究羅檀頭経」)
53	19	[コーサラ国オーバサーダ] チャンキン婆羅門が釈尊に帰依する。(MN.095 <i>Caṅki-s.</i> )
54	20	ポッカラサーティ婆羅門が死亡する。(『長阿含』020「阿摩昼経」、「仏開解梵志阿闍経」)

70	36	[舎衛城] トーデッヤ婆羅門の息子のスバが優婆塞となる。(MN.099 <i>Subha-s.</i> 、 『中阿含』152「鸚鵡経」、『中阿含』170「鸚鵡経」、求那跋陀羅訳『鸚鵡経』、 DN.010 <i>Subha-s.</i> 、MN.135 <i>Cūḷakammavibhaṅga-s.</i> )
----	----	--

[7-2] この年表を見て気がつくことは、ヴァーセッタとかバーラドヴァージャという、‘māṇava’ と表現される5人の「高名な婆羅門」たちの1世代後の若い婆羅門たちが、その師匠や父親に先駆けて釈尊の在家弟子になっていることである。

本稿の冒頭にも記したように、コーサラ国はインド旧来の宗教であったバラモン教の勢力の強いところであったが、ここに釈尊の教えが広まることになった最大の功労者は、何といても舎衛城の大富豪であった給孤独長者である。しかしこの時にはまだ、祇園精舎の建設因縁が物語るように、コーサラ王室の支持を得られていなかった。したがってコーサラ国における釈尊や仏弟子たちの活動を支えたのは、給孤独長者を筆頭とするそのころインド社会に台頭しつつあった商人階級であったが、それだけで布教の条件が満たされたわけでない。むしろ新興宗教であった釈尊の教えが受け入れられる精神的な土壌を作ることが不可欠であった。

そしてその面では婆羅門たちの支持が不可欠であったが、そのきっかけを作ったのは、伝統にこだわりのない、進取の気性に富んだ青年婆羅門たちたちであったろうことは推測するに難くない。それがヴァーセッタ、バーラドヴァージャたちであった。

後に仏典の編集者たちに「高名な婆羅門」と記憶される5人の婆羅門たちが釈尊の教えに帰依したり、理解を示すようになったのは、この青年婆羅門たちのおかげであったということがいえるであろう。そしてこれら婆羅門たちが釈尊の布教のかなり早い段階で優婆塞となったことが、釈尊の教えがコーサラ国をはじめマドゥラーなど西方ないしはその西北方方面や、南のコーサンビーやさらにそれ以南のデカン高原などに広まるきっかけとなったといえるのではなかろうか。このように考えてみると、これら青年婆羅門たちは婆羅門社会の影響力が強いインド社会の中で釈尊の教えを布教するにあたっての大きな宗教的地盤を作ったといえることができる。

5人の婆羅門たちが「高名な婆羅門」として記録されるについては以上のような背景があったものと考えられる。